

# J.G.ロビンソンの「思い出のマーニー」を臨床心理学的に読み解く

中植 満美子

## 1. はじめに

臨床心理学とは、「心の病」を対象とする心理学であり、「無意識」の存在を重視する。本論では、J.G.ロビンソン(1967)の「思い出のマーニー(“when marnie was there”）」という物語について、心理療法の実践から得られた知見と、無意識という観点から考察する。

## 2. 作者紹介

ジョン・G・ロビンソンは、1910年イギリス、バッキンガムシャーにて、四人きょうだいのふたり目、として誕生した。両親とも法廷弁護士で、母親はケンブリッジ大学に入学を許された最初の女子学生のひとりであった。ジョンは勉強よりも絵を描くのが得意で、4歳のときにはすでに画家になりたいと思っていたそうである。少女時代に父親が急死してしまい、さみしい思いをすることが多かったとされる。ジョンの娘のデボラが、「思い出のマーニー」の主人公であるアンナ像には作家の子ども時代の思い出がたくさん生かされている、と原書版のあとがきで語っている。14歳で絵本の挿絵を手掛け、1939年より執筆活動を開始している。

ジョンは7か所の学校で学ぶが、いずれの学校でも卒業試験を受けず、卒業していない。絵画については、チェルシー・イラストレーション・スタジオで学んでいる。1941年に、画家であるリチャード・G・ロビンソンと結婚し、二人の娘、デボラとスザンナをもうける。その家庭は、作中の大家族、リンジー一家を彷彿とさせるような、幸せなものだったとされ、その後の創作の源となっていると言われている。イラストレーターとして、クリスマスカードや挿絵の仕事をしていたが、やがて自分でも子どものための物語を書くようになった。1953年から74年にかけて、ジョンは代表作のひとつであ

る「くまのテディ・ロビンソン」シリーズを発表する。この作品には、娘のデボラがそのままの名前で登場しており、テディ・ロビンソンというクマも、デボラが持っていたぬいぐるみがモデルになっている。

主な作品に、「テディ・ロビンソン」シリーズ(福音館書店、岩波書店)、「おはようスーちゃん」(アリス館)、「すえっこメリーメリー」(大日本図書)、「クリスマスってなあに?」(岩波書店)、「庭にたねをまこう!」(岩波書店)などがある。

ロビンソン一家は、毎年夏になると、イギリス東海岸にあるバーナム・オーバーリー・ステイス(Burnham Overy Staithe)という、ノーフォーク州の海辺の町を訪れていた。潮の満ち引きで風景ががらりと変わるというこの土地が、「思い出のマーニー」の舞台であるリトル・オーバートンのモデルである。現在でもそこでは川のような入江や、大きな風車小屋、湿地に停泊している小さな舟やヨットをみることができ、この物語の愛好者たちが尋ねてくるらしい。

ジョンの娘デボラは、ある夏の日、バーナム・オーバーリー・ステイスの海辺で、マーニーの住まいである“しめっち屋敷”のモデルになる“グラナリー屋敷(穀物倉庫)”を母親が見つけたときの話を寄稿している。「ジョンは、淡い赤レンガの壁に青いドアと窓枠のある長くて背の低い、みるからに心地よさそうなお屋敷を見つけます。歩きながら、ふりかえると、その屋敷は姿を消して、風景の中にとけこんでしまったかのように見えたそうです。夕陽の最後のひとすじがレンガにあたって屋敷が再び姿を現すまでのわずかな時間のことでした。

砂地をすぎて、入江を渡りはじめると、ジョンは、屋敷の二階の窓のむこうに、小さな女

の子がすわって、長くて美しい金色の髪に、ブラシをかけてもらっているのを見たのです。これがマーニーの始まりだったのです

(Sheppard,D.,2002)。」

ジョーンと夫のリチャードは、それから毎日、その場所に行き、海水浴のあと、やわらかな砂丘を上までのぼって、そこで、物語の登場人物であるマーニーやアンナの人物像を思い描き、物語の構想を黒い固い表紙の小さな手帳に書き綴ったのだという。

また、ジョーンは、自分が子どもの頃感じていたことを、鮮明に覚えており、それが物語の主人公のアンナの「ふつうの」顔つきや、アンナだけが皆の「外側」にいる感じは、子ども時代のジョーン自身から描き出されたものだったとされる。

ジョーンは30冊以上の作品を世に送り出し、1988年にその生涯を終えた。

### 3. 物語のあらすじ

#### 登場人物

① 問題を抱える人 アンナ（主人公、小学生）、ミセス・プレストン（養母）

② 家族構成 養父ミスター・プレストン  
養母ミセス・プレストン  
アンナ  
義理の兄（独立して不在）

③ 主訴 不登校

#### （場面1） ロンドンの駅

登場人物) アンナ、養母のミセス・プレストン（スーザンとサム・ペグさん夫妻、担任デイビソン先生、医者ブラウン先生）

状況) 物語は、アンナがノーフォーク州のペグさん夫妻のところに列車で旅立つところから始まる。アンナは「ふつうの顔」をしている。ミセス・プレストンは心配して、あれこれ世話を

焼いたり、悲しそうな表情になったりしている。親子のようだが、アンナはミセス・プレストンを「おばさん」と呼んでいる。

#### ① アンナの状態像に対する見立て

状態像) アンナは小学校で、算数の授業の前になると具合が悪くなる。いつも一人でいることを好み、他の子どもたちとの交流には消極的である。他の子どもたちが興味や関心を持つ事に対しても、「どうでもよくなった」というような、疎外感・興味の喪失がみられ、アンナが活動を「しようとすらしめない」ことが担任には問題視されている。

つまり、アンナは、同級生と交流するのが苦手な非社会的な行動をとり、アパシー（無気力症状）に陥っている。アパシーとは無気力・無力感に苛まれている状態であり、うつの症状の一種である。

また、自分が他の人達が存在している輪の外側にいるような気持ちでおり、疎外感を感じている。養母であるミセス・プレストンを「おばさん」と呼び、心を開かない、防衛的で、「基本的信頼感」（Erikson,E.H.,1950）の獲得が不十分な状態である。

ここで「防衛機制」（defence mechanism）について取り上げる。「防衛機制（Freud,S.,1917）」とは、葛藤状態におかれた時に、自我が利用する多様な手段であり、無意識に発動すると考えられている。防衛機制は生まれつき備わっているものではなく、各個人が発達過程において次第に獲得していくものと考えられている。数ある手段の中で効果のある方法は得意（主要）手段として常用され、性格化しやすい。防衛が過剰であったり、非現実的であったりすると、神経症症状になることもあるとされる。アンナには、不快な感情、観念、体験を無意識の中に押し込めてしまう「抑圧」や、不快な経験の客観的事実だけを記憶に残し、不快な感情を抑圧する「分離」、そして、克服する事が困難な状況に陥った時、そこから逃れることによって合理

的解決を避ける「逃避」、といった防衛機制が発動していたと考えられる。

また、「基本的信頼感」とは、エリクソンによる心理社会的発達理論の第一段階、乳児期の発達課題である。これは、「自分はここに存在していてよい」という自信につながる感覚である。この基本的信頼感が「不信」を上回り体験されることが望ましいと考えられている。また、「不信」が大きいことがその後の病理に繋がるとエリクソンは述べている。

## ② アンナへのブラウン医師による対応

ブラウン医師により、アンナは転地療養を勧められる。アンナは日常から離れ、非日常の空間で、ゆったりと過ごすことが必要であった。

アパシーとはうつ症状の一種であることから、その治療法としては、十分に休養をとること、思い切り引きこもることが有効であると考えられている。日本には森田療法(1919)という治療法があるが、治療方針として、症状へのとらわれから脱して、「あるがまま」の心の姿勢を獲得できるよう援助する。うつ病治療の第一段階として、「絶対臥褥期」とよばれる時期を設けている。その時期に患者は終日個室に横になり、何もしないでいることが求められる。そうしていると、数日後には退屈を感じて、心身の活動欲が高まってくるのだという。この動きが、その後の治療の足がかりとなると考えられている。

アンナを、防衛機制でガチガチに身を固め、「ここにいてもよい」と思えずに苦しんでいる環境から取り出し、何も考えずに休養できる海辺の家へと送り出すことを推奨したブラウン医師の対応はまさにアンナが必要としていたものだったと言えるだろう。

(場面2) リトル・オーバートンの海辺のペグさんの家

登場人物) アンナ、ペグさん夫妻(スーザンとサム)

状況) アンナは、ノーフォーク州のペグさん夫婦の家に到着する。そこは田舎だが、清潔で気持ちの良い家で、アンナは自分の部屋も用意してもらい、療養生活がスタートする。

ペグさん夫婦はアンナに何をすることもなく、あれこれ余計な詮索などせず、アンナのあるがままを受け入れる。これこそまさに、その時のアンナが必要としていた環境、つまり、思い切り引きこまれる環境であったと言えるだろう。

なにもせずにぶらぶらと過ごす日々を始めたアンナであったが、そうするうちに、海辺で「しめっち屋敷」に出会う。その時、アンナは不思議な感覚に襲われる。その屋敷は、初めて目にする場所であるはずなのに、その存在はアンナにとってずっと以前から知っており、唯一変わらぬものと感じられ、そこに強烈にひきつけられていく。河合(1985)は、その不思議な既知の感覚を、「父母未生以前(ぶもみしょういぜん)」という言葉で表現している。それはまるで、「故郷」のシンボルのようなものであった。初めて出会うものなのにも関わらずである。

(場面3) リトル・オーバートンの海辺の生活登場人物) アンナ・ペグさん夫妻(スーザンとサム)、ワンタメニー(海辺の住人、寡黙な船頭)、スタッブズのおばさんとサンドラ(海辺の住人、ペグさん夫妻の知り合い)

状況) 毎日海辺を散歩するうちに、無口な船頭のワンタメニーに船にのせてもらい、潮の満ちた入江の中まで散歩するようになる。アンナはショートパンツ姿で動き回り、よく日焼けしている。

ペグさんの家に尋ねてきていた近所のスタッブズのおばさんの娘、サンドラと出会うが、気が合わず、心開けない。その後陰口を言われている事を知り、自分もサンドラに暴言を吐く。

他者へのこのような攻撃性は、社会的な主張性でもあり、枯れかかった植物のようだったアンナに生き生きとしたエネルギーの回復の兆しを予感させるエピソードである。おそらく、何

もせずに日々を過ごす中で、これから展開する物語を生きる為に必要な心の準備が整えられたことを示すひとつのサインであろう。

#### （場面4）しめっち屋敷

登場人物) アンナ・ペグさん夫妻（スーザンとサム）、ワンタメニー、マーニー（屋敷の少女）  
状況) アンナは、大好きなしめっち屋敷の窓の中に、長い金髪の子供が着替えているところを見つける。入江の入り口に、見慣れぬボートが置いてあり、アンナはそれに乗って一人でしめっち屋敷まで移動し、しめっち屋敷の船着き場でマーニーに出会う。二人はすぐに友達になり、ここからアンナの日常は一変する。しかしマーニーはアンナに自分の事は口外するなという。あくる日目覚めてマーニーのことを思い出す。あれは夢か幻か？マーニーは実在するのか？幻想か？幻覚か？妄想か？亡霊か？アンナが出会った少女は現実の存在だったのだろうか。

#### <イマジナリーフレンドか白昼夢か>

子どもたちが自分だけに見える想像の友達を作ることがある。それをイマジナリーフレンドという。映画「インサイドヘッド」のキャラクター、「ビンボン」や、「赤毛のアン」に出てくる、「書棚の飾り窓の中の少女」、「アンネの日記」の「日記さん」などがその例と言えるだろう。きょうだいもおらず、一人遊びが常態化しているアンナのような少女にとって、自分だけの想像の友達を持つ事は自然な現象であるのかもしれない。

類似した現象に、D.W.Winnicott（1953）の「移行対象」がある。母親のような重要な対象が自分のそばを離れている間、その対象の代わりとして機能し、子どもの慰めとなるものである。

「夢は無意識への王道である」

また、河合（1985）は、心と体をつなぐものは、「たましい」の国の住人であると述べ、心

と体のバランスが崩れるときにはこのような存在が必要になることについて言及している。

#### （場面5）しめっち屋敷のパーティ

登場人物) アンナ、マーニー、しめっち屋敷のメイドとナン、パーティのお客さま、ワンタメニー、マーニーの両親・エドワード

状況) アンナとマーニーは、その後、大の仲良しとなる。アンナは少しずつ自分の事をマーニーに打ち明けられるようになっていく。そこで、ロンドンでは言えなかったアンナの秘密が語られる。お互いの存在を羨ましく思う二人。しめっち屋敷のパーティで、「家のない花売り娘」のふりをアンナにさせるマーニー。二人はパーティの夜を心から楽しむが、そこにマーニーの従弟のエドワードが登場する。エドワードが屋敷にやってきてから、マーニーとアンナとのすれ違いが増えていく。

#### <あるがままの自己受容>

心理療法の目指すところのひとつとして、「自分のあるがままを受け止められること」が挙げられる。それはつまり、自分のこと、自分の状態を、自分で、これでいいと思えるかどうかということである。頑なに自分自身を自分にも他者に対しても閉じ、受け入れられなかった状態を、アンナはマーニーにだけには自己開示することができた。つまり、アンナはまず、自分自身を受け止められなければ、マーニーに向けて自己開示することは有りえなかっただろうし、この場面でアンナは大きく一歩前進した、と言えるだろう。

アンナは幼少期に実母を亡くし、祖母とも別れ、施設に入っていた孤児であった。しかし、マーニーは、そんなアンナを愛してくれる養父母がいるのは、むしろ放置（ネグレクト）されている自分より幸せではないかと言うのだ。二人のやりとりの中に、少女時代からの作家の葛藤が投影されているようである。

<作家は自分らしさを生きられなかった？>

J. G. ロビンソンは、「7つの学校に行ったが、卒業試験を受けられず、卒業していない」と先述した。優秀な母親を持ち、将来を期待されただろうロビンソンは、やがて父親と死別し、その後家族を必死で支えてきただろう弁護士の母との生活の中で、少なからず、自分も母のようにならねばならないと思い、「普通の顔」で自分を抑えて、無理をしていた時期を送っていたのではないだろうか。アンナの不登校状態や、海辺での療養の日々は、そのままロビンソンの娘時代に重なるように思えてならない。実際、そうした不適應の感覚の描写は、娘のデボラにより、ロビンソン自身の体験が生かされているという娘デボラによる記載がある。苦しくつらい娘時代に、ロビンソン自身の心の支えになったのが、生涯の生業となる「挿絵・絵を描くこと」だったのだろう。しかしながら絵画制作は非言語表現であり、言語を操る弁護士の業務とはあまりにもかけ離れており、そういう娘を弁護士の母がすぐに理解し受け入れられたとは考えにくい。7回の学校への入学はまるで失敗のやり直しのものである。ロビンソン自身、両親とは異質な自分に苦しんでいたとしても不思議ではない。

(場面6) 嵐の風車小屋

登場人物) アンナ、マーニー、エドワード  
ペグさん夫妻、ピアスの旦那さん(入江の住人)  
状況) 風車小屋をやたらと怖がるマーニーを勇気づけようと、アンナは悪天候の中、風車小屋へ向かう。その小屋の二階で、おびえきったマーニーを発見した。マーニーは、はしごを自力で下りられず固まっていた。アンナは怖がるマーニーの傍らに寄り添い、なだめながら、うとうとうたたねてしまう。気が付くとマーニーは、アンナを置いて、迎えに来たエドワードと先に帰ってしまった。アンナは、マーニーの裏切りに激怒する。「まっ暗ななか、おびえる私を置き去りにして、絶

対に許せない！」アンナは小屋を全速力で飛び出した。ピアスさんがアンナを見つけた時には、アンナは嵐の中、足をけがして、草むらに倒れ、意識を失っていた。

<「喪の作業」の必要性 >

アンナはプレストン夫妻に引き取られるまで孤児のための養育施設にいた。「また会える」と約束して、死んでしまった母と祖母。なぜ自分を置いて勝手に死んでしまったのだ、という、最初の傷つき(被害感情)がアンナのトラウマになってる。マーニーに置き去りにされた事件は、まさにこのトラウマの再現であり、この事件が起きたからこそ、アンナが抱えていた「被害感」が沸き起こってきたのである。だからこそ余計にマーニーに腹が立ったとも言えるだろう。これこそが、アンナの問題の根本にあった傷つきで、対処されなければならないものだったのである。置いて行かれた傷つき、死別。それには、まず「喪の作業」を行う必要があると考えられる。キュープラー・ロス(1969)が、「死の受容」のための段階として紹介したものに、次のような段階がある。それは「否認」し、「怒り」、「許し」、「引き受け」、「意味づけ」するプロセスである。これは自分自身の「死」の受容のためのプロセスだが、家族との死別に関しても同様の心の動きは生じ得るのではないだろうか。

(場面7) しめっち屋敷でのお別れ

登場人物) アンナ、マーニー、ペグさん夫妻  
状況) 足の怪我もあり、アンナは丸二日間寝込んでいた。三日目に、アンナは、まだ自分はマーニーを許せないが、マーニーがアンナの姿を見て、自分がどんな残酷なことをしたか思い出させてやろうという意地悪な気持ちで屋敷に近づく。マーニーが窓ガラスの中から叫んでいる。「あなたのところに行きたいのにいけないのよ・・・お願い、あんなふうにあなたを置き去りにするつもりはなかったの、あれからずっと

ここに座って泣いてた。お願いだから、私を許すって言って！」先ほどまで猛烈に怒っていたアンナだったが、このマーニーの言葉は、最初の死別体験以降、アンナが、ずっと求めていたものだったのだろう。アンナはマーニーに即座にこう告げる。

「もちろん許してあげる！・・・大好きだからね！あなたのこと、ぜったい忘れない。」

#### <「被害感」の克服・基本的信頼感の回復>

アンナはマーニーに裏切られたわけではなかったのだ、ということを知った。置き去りにされ、捨てられ、「いらぬ子」のレッテルを自分自身に貼っていた状態から、「愛される価値のある自分」を取りもどしていく。その上、「ぜったい忘れない」と、マーニーを自分の心の中に内在化させたのだ。目の前からいなくなっても、心の中で生き続けて、自分の事を大切に思い続けてくれる人、そんな存在はこれまでアンナの心の中にはいなかった。

この短い場面におけるアンナとマーニーのやりとりには、「被害感の克服」、「基本的信頼感の回復」、そして、「大切な対象の内在化」、というこの物語の根幹を支えるテーマが込められている。この変化は、その後潮の満ちた入り江でおぼれかけたアンナの力強い言葉として表現されている。「でも、おぼれるわけにはいかない。みんなわたしに好き勝手な事をすればいい。だけど、わたしがおぼれたくないといったら、ぜったいに、おぼれさせることはできない。何としてもあの角までたどりつかなくちゃ。」ほんの三日前のアンナとは別人のようである。

#### (場面9) しめっち屋敷の表と裏

登場人物) アンナ、ペグさん夫妻、ワンタメニー、ミセス・プレストン、しめっち屋敷にいた工事業者の男性

状況) 入江でおぼれかけたアンナを今度はワンタメニーが見つけて助けてくれた。今回は何日も寝込む羽目になり、心配したミセス・プレ

トンが会いに来てくれた。アンナはこの時に、養母に素直に甘えることができるようになってきていた。マーニーとのいろいろな出来事が、シャッターが下りてしまったかのように、まるでずっと昔のことのように感じられてゆく。かつて存在していた内と外の、二つの世界が融合したような感覚をアンナは体験する。

アンナは別の通りからしめっち屋敷を見つけ、そこが本来の表玄関であることを初めて知る。表と裏が統合されていく

#### <オモテとウラの統合>

無意識を心理療法に用いたのは、S.フロイトとC.G.ユングであるが、ユングはフロイトのように、無意識を受け入れられない感情や観念を閉じ込めておく場所としてではなく、無意識は意識を補助する存在である、と考えた。ユングは、人の人格形成に必要な自己実現とは、この統合のプロセスであると考えた。アンナによる、「しめっち屋敷」の表と裏の発見は、まるでユングの意識と無意識の統合、つまり自己実現の体現のようでもある。また、土居(1976)は「オモテとウラの精神病理」の中で、オモテとは、対人状況・対社会関係において外に見せるもの、ウラとは、外に見せないで内々にしておくものであると述べている。「ウラはいわば秘められた心で、外に示される心がオモテとなると考えられる。ちょうど顔が心を表すとともに、顔に現れない心もあるように (p.2)。」海辺の家に来て以来、アンナが体験していたのは内的世界の物語であり、回復期にさしかかったアンナは、ここで初めて、現実の人間関係に対峙するオモテの世界に辿りついたのである。

#### (場面10) 砂丘でのリンジー一家とのおいかけっこ

登場人物) アンナ、リンジー一家の五人きょうだい

状況) アンナは、海辺の家に来て以来、人々を遠くから見つめて、いろんな想像を思いめぐらしていた。しめっち屋敷に引っ越してきたリン

ジー一家の子どもたちも、アンナは自分が想像して作り上げた存在だと思っていたのだが、その五人のきょうだいとついに遭遇する日がやってくる。リンジー一家の五人きょうだいは、アンナをみつけて捕まえた。五人の名前は、アンドルー、ジェーン、プリシラ、マシュー、ローリーポーリーという。中でもおとなしいプリシラは、以前のアンナのように内向的で夢見がちである。きょうだいのはじめのうち、アンナも、プリシラが作り上げた空想の人物だと思っていた。

<「かくれんぼ」の意味するもの>

子どもの心理療法の中で、子どもたちはしばしば「かくれんぼ」や「おいかけっこ」をセラピストとやりたがる。「かくれんぼ」は「私を見つけて！」のサイン、「おいかけっこ」は「私をつかまえて！」というメッセージだろうと筆者は考えている。この出来事をきっかけに、いよいよ、引きこもっていたアンナが現実の人間たちと関わり始める

(場面11) リンジー一家のしめっち屋敷におよばれ

登場人物) アンナ、リンジーきょうだい、ミセス・リンジー

状況) アンナはリンジー一家のお茶の時間に呼ばれ、そこでプリシラは、アンナをなぜか「マーニー」と呼ぶ。薄れゆくマーニーの記憶と反比例して、現実のきょうだい達への関心が増していく。ミセス・リンジーは、アンナにちょうど必要な環境を与えてくれる、理想の母親像のように描出されている。

また、かつてプリシラは、引っ越してきた部屋で以前マーニーが書き記していた古びた日記帳を発見していた。プリシラは、アンナがそれを書いたのだらうと思っていた。プリシラがアンナを「マーニー」と呼んだのはそのためであった。「マーニー」の日記帳には、ダンスパーティや嵐の風車小屋の記載があり、アンナはマ

ーニーが過去に実在していた人物であったことを知る。

(場面12) リンジー一家にミセス・プレストンもお呼ばれ

登場人物) アンナ、リンジーきょうだい、ミセス・リンジー、ミスター・リンジー

状況) リンジー一家との親睦を日々深めるアンナ。ペグさん夫妻も元気になったアンナを喜んでくれる。夏の終りと新学期を予感するアンナは、ロンドンに帰ってからもリンジー一家やアンナが触れ合った浜辺の村の生活について、誰かと分かち合いたかった。そこでミセス・プレストンがお屋敷に招待される。予定していたギリお婆さんの訪問(リンジー一家の親戚で、マーニーの友人)に合わせて、皆で話をすることになる。その集まりの仲で、なんと、例の不思議な少女、マーニーは、アンナの実の祖母だったことが判明する。

<既視感の謎も解け・・・>

「しめっち屋敷」を見た時の不思議な既視感は、かつてアンナが自分の母と、祖母であるマーニーから聞かされ、見せられていた、過去の記憶によるものだった。

(場面13) リンジー一家にミセス・プレストンもお呼ばれ

登場人物) アンナ、リンジーきょうだい、ミセス・リンジー、ミスター・リンジー

状況) アンナのもう一つの傷つきが、ミセス・プレストンが、自分の養育のために国から補助金をもらっていたのを通知の手紙をたまたま読んで知ってしまったことだった。アンナは養父母が、自分をお金のために引き取ったと思ってしまったのだ。二人は、正面から向き合い、それについて話し合うことができた。

一方で、アンナは自分も、ミセス・プレストンさんの財布からお金を抜いていたことを謝罪し、ミスター・リンジーが見つけたマーニーのボ

ートのいかりを、盗んだことも告白して謝罪した。

<ネガティブ・アイデンティティを選択すること>

「虐待されるのは自分が悪いから。」被虐待児はしばしば、親の虐待行為を正当化し、酷い目に遭わされるのは自分が悪いからと思ひ込む。そう思う方が、自分が愛し、愛してもらえらるはずの大人たちからの暴言・暴力を受け入れやすいからである。そのため、子どもたちは、敢えてよろしくないネガティブアイデンティティを引き受けることがある。

それを自分のレッテルとしてしまわず、かつての失敗を自分の一部としても認める強さに、物語を通じたアンナの回復と成長が表されている。

#### 4. 考察

##### 1) アンナの回復に有効に働いた要因

①「うち」と「そと」をつなげる（こころとからだをつなげる）「たましい」の世界の存在

ユングが心理療法において最も大切に考えたのが、心の全体性ということであった。この心、というのは、意識の部分だけではなく、無意識の部分も合わせたものである。この全体性は、意識の領域で統制しきれない部分を無意識が補うことによって保たれている。無意識のこのような作用をユングは「補償」と呼んだ。つまり、意識と無意識の調和を保った状態、統合が、人間が人生で目指すべき自己実現であると考えた。

意識の側が一面化に向かうのに対して、無意識は均衡や調節を図ろうとして作用するのであるが、心の病を生じると、この作用が攪乱されてしまう。そのためにユングは、治療の目的を、補償が再確立されるように無意識の内容をしつかりと認識することである、と説いている。そのために心理療法の中で用いられるのが夢や象徴であり、山中（1996）はこれを「意識と無意識をつなぐ橋」と表現している。アンナの無意識に現れた「マーニー」という架け橋は、見事

にアンナを心の危機的状態から救い出す存在として作用している。

②基本的信頼感の再体験 あるがままの受容・がんばらなくていいということ

アンナが無意識の補償作用によって自分の中のマーニーの思い出に出会い、愛された過去を再体験する経緯は、アンナが自分らしくいられる海辺の家でこそ可能であったと言える。外側に対して防衛的に自分を守る必要もなくなり、あるがままで過ごす時間は、アンナの意識を内側へと向ける事が可能となった。自分のままでよいのだ、という環境によって、自分のままで愛されていたという過去の体験に辿りつくことが出来たのである。

③被害感の克服 実はどれほど祖母に愛されていたかという事実による認識の変化

物語の終盤に、アンナが、養母の財布からお金を抜いたり、マーニーのボートの碇を盗んだことを謝罪する描写がある。作品の冒頭では今にも壊れそうな弱弱しい不登校児だったアンナが、盗みを働いていたことを告白するのである。盗みは、空虚な自分を埋めたい、満たされたい衝動を表すものでもある。犯罪に手を染める青少年と話をすると、決まって語られるのが、「自分もまた被害者だった」という訴えである。置き去りにされ、「家庭」を奪われた、空っぽの自分を埋める為に必要だった「盗み」の罪を、祖母との再会、そして新しい家族や友人との出会いを経て、アンナは認めて謝罪する強さを身に付けることが出来た。もはやアンナは「被害者」ではないのである。

④喪の作業

マーニーとの出会いと別れは、アンナが必要としていた「喪の作業」そのものであった。人は大切な人との別れに際し、別離からの傷つきから立ち直るための作業を体験する必要がある。アンナのマーニーとの突然の別れは、アンナの根底にあって、触れられずにいた母や祖母との死別（別離）からの傷を、無意識的に、同じような経験を再体験させるプロセスを経て、克服

させる役割を担っていた。祖母であるマーニーが幼かったアンナに伝えたかったメッセージを、アンナは無意識の世界で受け取ることができ、またアンナ自身が伝えたかったメッセージを大切な対象に伝えることも出来たのである。

## 2) 作家による魂のメッセージ

マーニーがアンナに残したメッセージは、アンナの祖母であるマーニーがアンナに残したかった「たましい」のメッセージだったように考える。アンナへの愛、アンナへの関心と、いつまでも一緒にいてやれないことへの謝罪、愛されて生まれてきた、というメッセージだったのだろう。

また別の意味では、ネグレクト環境で育ったマーニーには、子育ては難しく、アンナの実母とのよい関係を充分育てきれなかったかもしれない。それについての謝罪の意味もあっただろうし、これこそ、作者自身が自分の母親に求めている贖罪の言葉だったかもしれないと考える。

アンナが作者 J. G. ロビンソンの少女時代の投影、と前述したが、作者の生い立ち等から、マーニーもまた、ロビンソンそのもののように思えてならない。マーニーを置いて、大人だけの世界で生きるマーニーの母もまた、常に忙しく働く賢い母であり、「もらいっこの方が、もらってくれた人に愛されているって思える」程の寂しさを作者自身が体験していたのではないだろうか。

この物語を執筆している間、作者は自分の子ども時代と出会い、無意識のうちに表現の中に自分の人生が投影されていったように思える。無意識は意識の世界を補い助けてくれるものでもある。そうだとしたら、理想の母親であるミセス・リンジーや、優しいミセス・プレストン、スーザン・ペグおばさん、ギリールさんの見せる母性の世界もまた、ロビンソンの体験してきた世界であり、執筆作業に没頭しながら、ロビンソン自身が、「母になって気づく、弁護士の母の温かなイメージ」に、意識せずに出会うこと

が出来たのではないかと思うのである。父と死別したことを乗り越えられず、蓄積していた悲しみ、寂しさ、くやしき、むなしき、そういうものもこの作品の中に吐き出して、子ども時代に理解できなかった弁護士の母の生き方を許し、受け入れる、J. G. ロビンソン自身の喪の作業でもあり、世界の再統合の旅だったのではないだろうか。

## 参考文献

土居健郎 (1976) オモテとウラの精神病理  
萩野恒一 (編) 分裂病の精神病理 4 東京大学出版会 p1-p20

Erikson.E.H. (1950,1977) *Childhood and Society*, Norton & Company, Inc (幼児期と社会,仁科弥生訳) みすず書房

Freud.,S. (1917,1977) *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, (精神分析学入門, 懸田克躬訳) p 63-p 544 フロイト  
懸田克躬編 中央公論社

河合隼雄 (1967) ユング心理学入門 培風館  
河合隼雄 (1985,2014) 『思い出のマーニー』を読む, 特装版 思い出のマーニー (J. G. ロビンソン, 松野正子訳) p 387-p 404 岩波書店

Kubler-Ross,E.,(1969,1971) *On Dearth and Dying*:死ぬ瞬間 (川口正吉訳) 読売新聞社

松瀬喜治・松瀬留美子 (2013) 絵本に学ぶ臨床心理学序説 ナカニシヤ出版

Robinson,J.G.,(1967,2014) *when marnie was there*, William Collins Sons &Co.,Ltd : 特装版 思い出のマーニー (松野正子訳) 岩波書店

Sheppard.,D.,(2002) *Postscript*, 作者あとがきにかえて 特装版 思い出のマーニー (J. G. ロビンソン, 松野正子訳) p 381-p 386 岩波書店

山中康弘 (1996) 臨床ユング心理学入門 P H P 新書

Winnicott.,D.W.(1953 )*Transitional Object  
and Transitional phenomena*, Playing and  
Reality (1971,1979) Tavistock Publications  
Ltd : 遊ぶことと現実 (橋本雅雄訳) p1-p35 岩  
崎学術出版社